

<前号 (214) 号から続き>

ポーランド南の都市クラクフと正反対の北側、バルト海に面したグダニスク (Gdańsk) という港町にも履物の歴史がたくさん埋まっています。このグダニスクの街並みはカラフルでとっても可愛らしくポーランドの有名な観光地の一つです。



グダニスクの街並み Gdansk-St. Mary's Street
by Grzegorz Gruszczyński

しかし、一時は廃墟のようになってしまった過去も併せ持つ歴史ある都市です。世界的には琥珀の産地として有名ですが、ぱっと見た感じでは、“履物”との関係は特になさそうにみえます。かわとはきもの213号で紹介した17世紀のポーランドで最高なものについての諺「グダニスクのウォッカ、トルンのジンジャーブレッド、クラクフの乙女、ワルシャワの靴 (ポーランド語原文: toruńskim pierniku, gdańskiej wódce, krakowskiej pannie i warszawskim trzewiku)」ではグダニスクの最高なものは“ウォッカ”でした。そんなウォッカが最高と言われていたこのグダニスクにあるグダニスク考古学博物館 (以下「博物館」という。) で、2016年に大変興味深い履物の展覧会が開かれました。



中央下部に見える半円のトンネル門の左側がグダニスク考古学博物館 by 1bumer

この博物館はグダニスク旧市街地で発掘調査を行い、多くの革製品を発見しており、それらの保存・修復に長年携わっています。博物館によるこの発掘調査に関する資料 (What did the former Gdańsk inhabitants wear? conservation of leather elements of footwear and clothing from archaeological research carried out in the quarter of Szeroka, Tandeta, Grobla II and Świętojańska streets in Gdańsk, in 2006-2008) を見ると、旧市街地で出土した約90%が靴とその製造廃材だそう！靴そのものだけでなく、靴を作る過程で出た端材や製造途中の靴製品なども大量に出土しています。そう、このグダニスク周辺には古いもので8世紀頃の革靴の遺物が眠っていたのです。この発掘調査対象の旧市街地はモトワヴァ川沿いの湿地・水際に発達した都市で、地中の水分が多く無酸素に近い層が広がっていて、こうした層は木材や革など有機質の遺物を“水浸しのまま”保存しやすいことが知られ、実際に市庁舎地下でも自然湿地が木造遺構を保存していたと報告されています。

14世紀、人口数千人のグダニスクには、靴



モトワヴァ川 by Karel Frydryšek

職人ギルドに77人の職人がいました。彼らは靴を縫う職人で、その横には、すり減った靴の修理やリメイクだけを行う、いわゆる靴修理専門の職人もいました。博物館があるマリアッカ通りは中世には靴店や精肉店が並ぶ通りだったようです。2006年から2008年にかけてシェロカ通り、タンデタ通り、シフィエントヤンスカ通り周辺で行われた考古学的発掘調査において、出土した14世紀から16世紀の皮革製品の保存修復が行われました。2年間で9,069点の遺物が保存されて、30足の靴が復元・部分復元され、その復元方法も出土した革の元の縫い目の残っている穴だけを使ってパーツを断片ごとに縫い戻して中世の靴の型紙知識と合わせて復元する作業だったようです。保存状態が良いものだと肉眼でも糸があった痕跡（押跡）が見えるのでそれに沿って作業を進めたそうです。これらの復元された靴たちを含めた展覧会「Každy krok zostawia ślad / Every step leaves a mark」が開催されました。この展覧会はその後ポーランド西部にあるポズナン考古学博物館（Muzeum Archeologiczne w Poznaniu）やヴロツワフ考古学博物館（Muzeum Miejskie Wrocławia - Muzeum Archeologiczne）、北部ホイニツェのJ.リドコフスキ歴史民族学博物館（Muzeum Historyczno-Etnograficzne im. J. Rydzkowskiego w Chojnicach）、北東部のケントシンにあるヴォイチェフ・ケントジンスキ博物館（Muzeum im. Wojciecha

Kętrzyńskiego）へと巡回しています。各会場で約70～130点規模の靴と関連資料が紹介されました。展示品は、最も古いものでは12世紀に遡り、最も新しいものでも約300年前のものでした。

考古学的発見による土から出土した靴たちの類似例として、同じくポーランド北部の港湾都市エルブロンクでも旧市街の発掘調査から数多くの革製品が出土しています。その中でも注目されるのが、15世紀に遡る革靴底です。このエルブロンクもグダニスクと似た都市構造をしているため（（交易港、河川・湿地に隣接、木造都市（有機物が埋没保存されやすい）、手工業ギルドが発達等）、水分を多く含む地層という保存環境の良さから、靴底には摩耗痕のほか縫製痕までもが明瞭に残り、当時の人びとの生活を具体的に伝える考古資料となっています。資料を見てみると、分析対象となった靴底の多くは縫製後に裏返して成形する「ターンシュー」製法によるもので、中世ヨーロッパ都市に広く見られる一般的な履物でした。サイズ計測の結果、成人男性用を中心としつつ、女性や若年層とみられる小型サイズも確認され、都市人口の幅広い層が革靴を日常的に使用していたことが伺えます。＜次号へ続く＞